

10) 脊髓空洞症の治療

— 8例の経験から —

川上 敬三・長谷川 彰 (秋田赤十字病院)
近 貴志・吉村 淳一 (脳神経外科)

脊髓空洞症は古くから知られた疾患ではあるが、わが国で容易に診断されるようになったのは、Metrizamideが導入された昭和53年頃からである。

我々は昭和57年の症例を最初に、以来8例を経験した。症例は男性1名、女性7名、初診時の年齢は19～49才である。

この内、運動障害のため日常生活に支障のある6例に手術を行い、運動障害が軽微な2例は経過観察中である。

syngo-subarachnoid shuntを行った3例および posterior fossa decompression (PFD)を行った3例の比較では術後経過に差はなく、術後は全例において空洞の縮小は良好で、症状の改善が見られた。しかし、症状改善の程度は空洞縮小に比べ少なく、しかも手指伸展の改善は不良であった。

また、MRI では空洞は縮小しているにも拘わらず、半年以後に麻痺が徐々に進行する症例があった。ただし、運動障害が軽い状態で PFD を行った1例では、術後8年間、改善の状態が続いている。

以上の経験から、脊髓空洞症に対する手術は単純な PFD で充分であり、しかも、早期診断、早期の PFD で良好な経過が期待されるものと考えている。

我々が行っている PFD は、約 6×4 cm の後頭下開頭に、約 2.5 cm の atlas arch resection を、時には第2頸椎の椎弓切除を行った後、両側小脳扁桃間を開いて第4脳室を開放するだけで中心管の塞栓は行わず、余裕をもって硬膜形成を行う単純な PFD である。

運動障害が軽微で経過観察をしている2例においても、それぞれ8年、4年半の観察期間において、症状の悪化はなく、しかも、空洞は自然に縮小した。従って、運動障害が軽微な症例では、MRI 検査を経時的に施行しながら、経過観察してよいと思われる。

11) 経蝶形骨洞手術を行なった鞍内腫瘍性病変中、下垂体腺腫以外の4例について

外山 孚・小泉 考幸 (長岡赤十字病院)
小股 整・渡部 正俊 (脳外科)
金子 博 (同 病理)

トルコ鞍は小さな空間だが、下垂体腺腫を代表に数多くの病巣が発生する。近年 MRI 等の進歩により、小

さな病巣が早期に発見されるようになった。そこでそれらの疾患の鑑別診断が必要になる。近年、我々は、42例の経蝶形骨洞手術を経験した。そのうち下垂体腺腫以外の腫瘍性病変4例 (intra-sellar meningioma, non-specific inflammation, granulation, Rathke's cleft cyst) について、retrograde に、それらの鑑別診断について考察した。

症例は26～67才。全例女性。初発症状は、視力視野障害1、複視1、体重減少1、精神症状1。内分泌検査で2例に PRL の高値が認められた。神経放射線学的に、下垂体腺腫との鑑別はむずかしく、meningioma では、CT, MRI ともに造影剤で、adenoma に比べてより強く、均一に enhance される。thin slice の MRI で腫瘍発生部位近辺の硬膜が Gd で enhance される。inflammation, granulation と adenoma の鑑別もむずかしい。Rathke's cleft cyst は、CT, MRI とも特異的なものはない、とまで言われ、のう胞内の含有物によって所見が変わると言われている。我々の場合も、前3者は、adenoma の診断で、後者は、診断のつかないまま手術している。

Intra-sellar meningioma は非常に稀であり、diaphragma から発生して、鞍内～鞍上に進展する。tuberculum sellae meningioma との鑑別が問題となるが、MRI で diaphragma が造影されない限り、鑑別はむずかしい。我々の症例は、手術所見から判断した。鞍内腫瘍性病変の摘出に、すべて経蝶形骨洞手術が推奨されるが、Giant-cell granulomatous hypophysitis, Lymphocytic hypophysitis 等の本来保存的に治療すべき疾患で手術によって、症状の増悪が考えられる場合もあり、診断には慎重をようする。

12) 転移性脳腫瘍に対する治療方針の検討

吉田 誠一・森井 研 (県立がんセンター)
渡辺 正人・斉藤 隆史 (新潟病院脳神経外科)
村上 直人

遠隔転移をもった進行癌の1つの病態である転移性脳腫瘍の治療には多くの問題点が残っており、根治的な治療は望めないことが多い。

しかし、原発巣が良くコントロールされており、早期に治療を成し得た転移性脳腫瘍の予後は比較的良好であり、その治療方針に関しては議論の多いところである。

1986年5月から1994年3月までに当科で治療された転移性脳腫瘍195症例を対象に、救命的な意義をもつ脳